

小5国語④

氏名

月 日

/5問

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

(少年が、道をたずねたおばあさんを案内しています。)

「まどろっこしいでしょう。ごめんなさいね。」

「いいえ、大丈夫です。うちのおばあちゃんもゆっくり歩くから、慣れてます。」

「あら、おばあちゃんと一緒に住んでいらっしゃるの？ いいわねえ。私は一人でねえ、さびしいものですよ。」

① (こういうとき、なんていってあげればいいのかなあ。)

「いいえ、一緒じゃありません。でも近くにいます。」

「坊やさんは、おいくつですか？」

「十一歳です。十一歳と一カ月。」

「私はねえ、腰の骨のカルシウムが少なくなつて、骨がすりへつてしまう病気なの。老人性の病気で、完全にはよくなるらないんですって。」

「あ、うちのおばあちゃんも同じです。でも、なるべく歩いた方がいいそうです。」

「そうですねえ。」

「ここです。」

と少年は左手の建物の前の、コンクリートのスロープを指さした。

「ありがとうございます。助かりました。」



おばあさんは頭をさげた。

「どういたしまして。」

と少年も頭をさげた。頭をあげると、まだおばあさんはさげていたので、少年はもう一度頭をさげた。そして、ちよつと上目づかいをして、おばあさんと一緒に頭をあげた。

② 自転車で乗って走り出そうとして、おばあさんの姿を振り返ると、もう半分ぐらいはスロープを登ったかと思つたのに、まだ地面近くにいるのだ。少年はおばあさんに走り寄つた。そして自分のおばあちゃんが階段を上るときのように、肩を貸して腰を支えてあげた。

スロープの一番上まで登ると、おばあさんはまた頭をさげた。少年も、今度は頭をさげたまましばらくそのままにして、それから頭をあげた。少年はおばあさんの目を見て、びっくりしてしまつた。

③ 涙がにじんでいたのだ。

「まいったなあ。うちのおばあちゃんもそうだけど、すぐ泣くんだよなあ。坊やさん、か。まいったなあ。」

少年はまた自転車で乗り、せまい道を抜け出し、大きな道路に出た。

(千川あがた「十一歳の自転車」による。)

